F2-32

都市における公共空間とその社会性
ーパブリックスペースと人の行為、周辺環境との相互関係ー
Sociality of public spaces in cities
Correlation between public space, human behavior, and peripheral environment

○北村駿季[1]，　八藤後猛[2]
Shunki Kitamura*[1], Takeshi Yatogo[2]

The purpose of this study is to research for factors that enable effective and highly feasible utilization of urban space. The focus on the social and economic aspects of urban space utilization according to the literature the study.
In urban space utilization and placemaking, research on behavior observation, research on showing and systematizing social value, and discussion were conducted with the demand for modern city planning. However, economic value is emphasized in urban development, and the abstract and ideal use of urban space is not considered important.

１．研究背景・目的

近現代の都市計画の需要とともに、都市空間活用やプレイスメイキングなどで、多くの行為観察研究や社会的価値を示し体系化する研究、議論が行われた。しかし、都市部の都市開発では経済的価値が重視され、抽象度が高い理想的な都市空間活用の重要度は低い。本研究は、文献調査をもとに都市空間活用の社会的側面と経済的側面に焦点を当て、より効果的で実現性の高い都市空間活用を可能とする要因を探索することを目的とする。

２．調査方法

Figure 1.に示す都市空間活用の古典的名著を対象に、文献調査を通して歴史的変遷や現状を把握する。また、提唱されてきた理論や手法を現代に応用し、実空間に活かすにはどのようなことが必要かを捉える。

３．結果・考察

３－１．都市空間活用の普遍的で応用可能な知見

都市における公共空間の活用は、既存文献から数多くの社会性を重視した議論や検討、考察、提案がされている。歴史的変遷を見ると、近代以降欧米を中心に都市の公共空間活用は行為観察や事例分析から、計画、設計、整備手法等で社会的な役割とその重要性について多くの知見が得られており、それらは普遍的で現代にも通ずる、応用可能なものであることが多い。

３－２．成熟社会と都市空間の社会性

日本は人口減少社会に突入し、人々は趣味やライフスタイルを重視するようになり、不動産の容積率を増やすだけでは、都市としての発展に限界が見えている。最近ではまちづくりの視点が重視されるようになり、2000 年代以降、わが国では景観法や歴史まちづくり法など、定性的な価値を尊重する法制度が整備され、モノを創って消費するだけでなく、住民や訪問者など地域関係者とともに地域を育てる取組が増えている。都市の豊かさが今後の都市の価値、不動産の価値を左右すると仮定すると、公開空地や公園など都市の公共空間は、都市のイメージ*[1]に代表するようにノード（結節点）としての役割やディストリクト（地域）の充実

名称	発行年 著者
広場の造形	1889年 カミロ・ジッテ
近隣住区論	1929年 クラレンス・ペリー
都市と広場	1959年 P・ズッカー
都市のイメージ*1	1960年 ケビン・リンチ
アメリカ大都市の死と生	1961年 ジェイン・ジェイコブズ
都市への権利	1968年 アンリ・ルフェーヴル
かくれた次元*4	1966年 エドワード・T・ホール
歴史の都市明日の都市	1961年 L・マンフォード
トポフィリア*3	1974年 イーフー・トゥアン
パタン・ランゲージ	1977年 クリストファー・アレグザンダー
公共性の喪失	1977年 R・セネット
The Social Life Of Small Urban Spaces	1980年 ウィリアム・ホワイト
リバブル・ストリート	1981年 ドナルド・アップルヤード
建物のあいだのアクティビティ*2	1987年 ヤン・ゲール
都市という劇場	1988年 ウィリアム・H・ホワイト
サードプレイス	1989年 レイ・オルデンバーグ
居住環境の計画―すぐれた都市形態の理論	1981年 ケビン・リンチ
人間のための屋外環境デザイン	1990年 クレア・クーパー・マーカス
The next American metropolis	1993年 ピーター・カルソープ
Placemaking	1995年 リンダ・シュニークロス
場所の力	1995年 ドロレス・ハイデン
場所の現象学	1999年 エドワード・レルフ
空間の生産	1991年 H・ルフェーブェル
要塞都市	1992年 M・ディブィウス
オープンスペースを魅力的にする	2000年 Project for Public Spaces
Placemaking	2002年 チャールズ・ボウル
The Great Neighborhood Book	2007年 ジェイ・ウォールジャスパー
人間の街	2010年 ヤン・ゲール
都市はなぜ魂を失ったか	2010年 シャロン・ズーキン

Figure 1. List of search literature

１：日大理工・院（前）・まち　２：日大理工・教員・まち

など 5 つのエレメントそれぞれを結ぶ、都市空間の連続性に寄与するといえる。また、人の記憶に残る都市、わかりやすい都市、イメージのしやすい都市という視点では、都市の各要素が散り散りに存在するよりも、それぞれの要素が連続的であることが重要といえる。効率性や必要活動*[2]に重点を置いて環境が整備されてきた近現代の日本の都市構造では、人々の移動と活動は目的地に対して、発地点と着地点以外の空間は通路となっていることが多い。無機質な空間は、活動意欲がわきづらく、空間が使われないという悪循環に陥る。場所への愛*[3]、空間の居心地とストレスの関係から、ストレスの緩和や記憶の観点からも、社会性の高い都市空間の形成は都市の価値や空間の価値、公共福祉的価値において重要な役割を担うと考えられる。

３－３．都市空間の計画とエリアマネジメント

ただし、闇雲に空間を開けばよいというわけでもない。かくれた次元*[4]に代表するように、人間の生物学的な特性や、文化的特性など、人のことを考慮せずに設計された空間は誰にも使われず、管理にばかり費用がかかるデッドスペースになることが危惧される。

都市空間における利用者、行政、民間の関係を Figure 2.に示す。多くの開発事業者は、総合設計制度などで設けられた公開空地など、既存の空間を有効活用するために、エリアマネジメントとして、様々なイベントを行っている。イベント一つ一つに時間や費用がかけられており、地域と良好な関係を築きたいという意図がうかがえる。実際、エリアマネジメントで行う企画は地域に貢献する催事やマルシェ、オープンカフェなどにぎわいを生み、体験を共有するイベントが多い。

一方、イベントが開催されていない期間は空間の活用度合が低くなる傾向がある。よって、空間活用として有効と考えられるのは、Figure 3.に示すように、イベントなど多くの人数で行う、公的でにぎわいを生む活動と、日常的に気軽に地域関係者が使用できる私的利用による、利用者がリラックスする行為、両者の促進と循環であるといえる。

３－４．都市の発展と経済性の考察

文献から得られる知見は、どの程度実際の都市空間に効果を与えているだろうか。東京に焦点を当てると、近代以降欧米の考え方が積極的に取り入れられ、効率的で資本主義的な発展を遂げた。そこで重視されているのは、開発者にとっての利益であり、経済性の比重が高い。開発者は営利目的で財産である土地の運用を望むのは明確である。そして今日まで、容積率の緩和などによる経済効率の向上が、行政が求める環境配慮

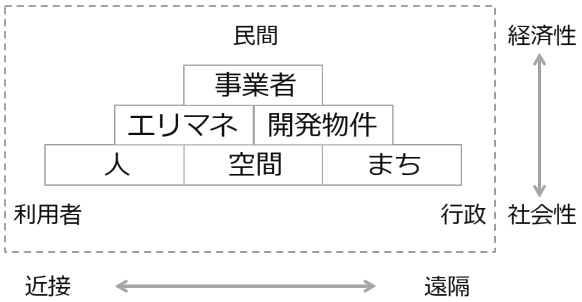

Figure 2. Relationship between urban space and related parties Participants

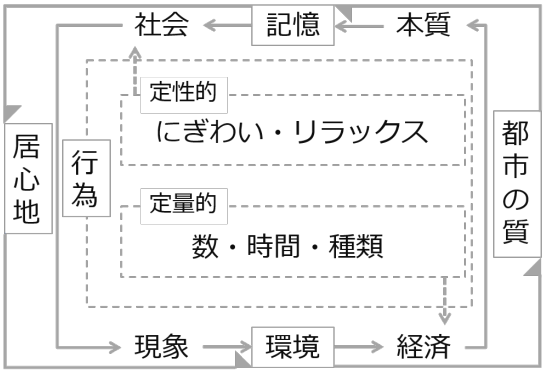

Figure 3. Hypothesis of circular structure in urban space

や社会性の確保等の基準の中で行われている。よって、開発者にとって、社会性よりも経済性が重視されてきたのは必然的である。

また、根本的に民間がつくった公共空間で行われる人の行為は、経済的指標を用いることが難しい。各活動の目標や成果を KPI や KGI といった定量的な経済性評価指標で測ることは難しく、いずれも来訪人数などかろうじて数値化できるもので捉えるにとどまる。そして、同時に定性的に成果を評価することも難しいのが実情である。しかし、それでは資本主義的な発展を遂げてきた日本の都市において、社会性が充実される都市空間活用の促進が困難という事実は変化しない。

ここで、公的・私的な空間活用としての社会的な活動に経済性を見いだすと、結果的に社会性が促進されるのではないかという仮説が生まれる。広場空間の有効活用の重要性は文献に示されるように、１００年以上磨かれ続けてきた。その知見を応用し、推進することが民間や行政、地域にとってどれだけ経済的利益を生むのかがわかれば、格段に社会的な都市空間活用に取り組む意義が見いだされ、取り組みが促進されるのではないかと考える。空間の良質な活用と管理は、社会性と経済性の両方が重要である。多く示されている人間主体のまちづくりの推進には、定性的な評価のみならず、定量的な経済評価指標が必要であると考える。